

第二王子の側室に

なりたくない

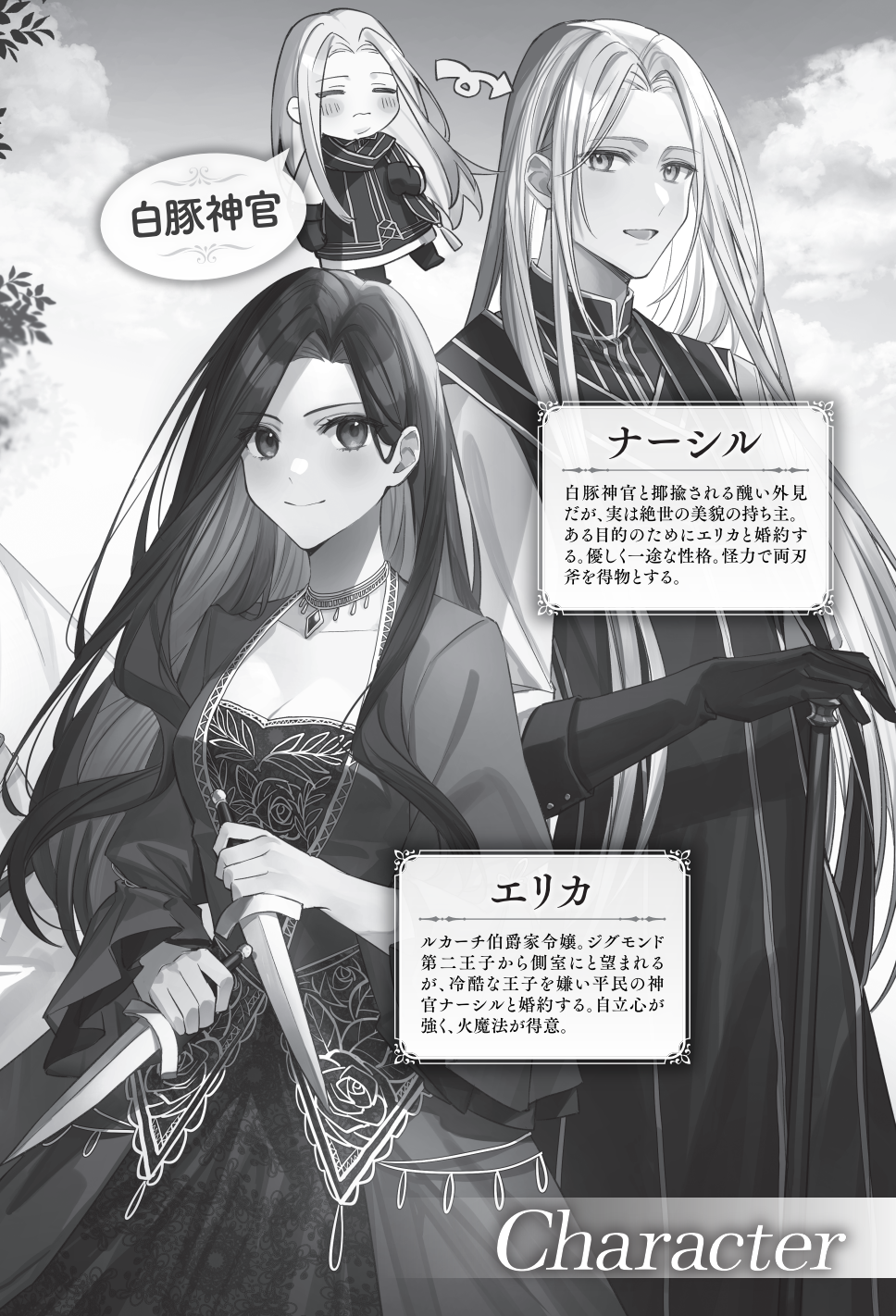
思っていたら、

正室

になってしまいました

～おてんば伯爵令嬢が攻撃魔法を磨いて

王子様と冒険者デビューするまで～



白豚神官

ナーシル

白豚神官と揶揄される醜い外見だが、実は絶世の美貌の持ち主。ある目的のためにエリカと婚約する。優しく一途な性格。怪力で両刃斧を得物とする。

エリカ

ルカーチ伯爵家令嬢。ジグモンド第二王子から側室にと望まれるが、冷酷な王子を嫌い平民の神官ナーシルと婚約する。自立心が強く、火魔法が得意。

Character



ルドルフ

ルカーチ伯爵家当主。エリカとアドリアンの父。家の繁栄を第一に考える策士。

ジグモンド

第二王子。エリカを側室にと望んでいる。金髪碧眼の美形だが、使用人に暴力をふるうなど冷酷な性格をしている。

レオン

王宮の第一騎士団所属騎士。明るく爽やかな好青年だが、人の名前を覚えられず、なかなか婚約者がみつからない。アドリアンとは学生時代からの付き合い。

アドリアン

ルカーチ伯爵家の令息。エリカの兄。おてんばなエリカや貴族らしからぬレオンに振り回されている。面倒見がよく、苦勞性。

第二王子の側室に なりたくないと思っていたら、 正室になってしまいました

～おてんば伯爵令嬢が攻撃魔法を磨いて
王子様と冒険者デビューするまで～

◀プロローグ▶	『猟奇的な思い出』	006
◀一章▶	『男になりたいわけではない』	014
◀二章▶	『第二王子の側室にはなりたくない』	047
◀三章▶	『冒険者登録』	087
◀四章▶	『デートのはずだった』	126
◀五章▶	『第二王子の陰謀』	176
◀六章▶	『卒業祝賀会』	207
◀エピローグ▶	『わたしの大好きな王子様』	245
◀番外編▶	『アドリアン・ルカーチは、 世界で一番幸せな男である』	251
◀番外編▶	『獅子の眠り』	264
◀番外編▶	『紋章の理由』	302

プロローグ 『猟奇的な思い出』

夏の暑さもだいぶやわらぎ、過ごしやすくなってきた。

涼しい風がテラス席を吹き抜ける。

大好きなパフエを前に、わたしはスプーンを握る気力もなくなだれた。

「もう国を出るしかない……」

わたしは呻くように言った。

もうダメだ。

学園卒業まで、あと三ヶ月しかない。

この一年、血を吐く思いで婚活してきたが、全滅だった。

あと三ヶ月で恋人を見つけ、婚約までこぎ着けるなんて無理だ。一年で出来なかったことを、三ヶ月で出来るとは思えない。

「待ってエリカ、早まらないで！」

二個目のケーキに取り掛かろうとしていたフォークを置き、ララが慌てたように言った。

どうでもいいが、ララ、ダイエツト中だと言ってなかったか。

なぜ君の前には、ケーキが三つもあるんだね。

「何も国を出なくても……。第二王子はしよせん、側室のお血筋でしょ？　そこまで怖がらなくてもいいんじゃない？」

わたしはララを見た。

赤毛に青い瞳をした、ちよっぴり太目の優しい友人、ララ。

彼女には、いつも助けられてきた。

第二王子に目を付けられてからというもの、地獄のような学園生活を送ることになったわたしを、何くれとなく気づかい、支えてくれた。

しかし、ララは常に前向きなため、物事を楽観視するきらいがある。

「……ララだって、ジグモンド様のことは知ってるでしょ。学園でも有名じゃない、あのサド……、いや、その、冷酷なお方だって」

「まあ確かに、いろいろ、そのう、問題のあるお方だとは聞いてるけど」

「聞いただけじゃないでしょ！ 見たでしょ、ララ！」

わたしは思わず大声を上げた。

思い出すだに身の毛もよだつ。

二年前、わたしは学園内で偶然、第二王子ジグモンド様が、小姓を折檻せつかんしているのを目撃してしまったのだ。

王都内に一つだけある学園は、十二歳以上の貴族の子女を受け入れる教育機関で、国内の主だった貴族子弟はほぼすべて、ここに入学する。

学園内での暴力行為は固く禁ばれているし、入学してしまえば親の爵位などは関係なく、生徒はみな平等な立場となる——というのが建前だが、もちろん平等など存在しない。学園は貴族社会の縮図だ。

しかも、貴族同士の諍いさかいというならまだしも、小姓への暴力となると、教師であつても手出しはしづらい。

わたしは校舎の陰に隠れ、鞭むち打たれる小姓の悲鳴を聞きながら、自分も悲鳴を上げないように両手で口を覆った。

ジグモンド様は、執拗しつように小姓へ鞭をふるっていた。

何度も何度も鞭を打ちおろし、小姓の悲鳴を楽しむように暴言を吐いた。

「ほら、は這いつくばって謝れよ。まったくおまえにはウンザリさせられる。もっと鞭で打たれたいのか？」

お許しください、申し訳ありません、どうかお許しください、と小姓は泣きながら謝ったが、鞭の音は止まなかった。

しばらくして、ジグモンド様は「おまえのせいで授業に遅れそうだ」と小姓に鞭を叩きつけ、その場を去っていった。

わたしはジグモンド様の姿が見えなくなったことを確認してから、慌てて小姓に走り寄った。

小姓は血まみれで、意識も朦朧もうろうとしている様子だった。

治癒魔法が使えれば、とこれほど思ったことはない。

わたしはそこそこ魔力量が多いのだが、なぜか攻撃魔法しか適性がなく、治癒魔法が使えないのだ。

その後、授業に現れないわたしを心配して探しに来てくれたララと一緒に、わたしは何とか第二王子の小姓を治療室まで運んだ。

雇人が召使を鞭打つのは、往々にして耳にする話だ。

しかし王族、それも第二王子のような貴人が、あれほど執拗に暴力をふるうのは、常軌を逸している。

そんな異常者に目を付けられてはたまらない、とわたしは治療室の先生に口止めをお願いした。小姓も意識を失っていたし、わたしが王子の暴力行為を目撃したことは、誰も知らないはずだ。それなのに、なぜかそれ以降、ジグモンド王子にしつこく付きまとわれるようになったのだ。ある日わたしは、勇気をふるってジグモンド王子に聞いてみた。

「なぜジグモンド様は、わたくしのようなつまらぬ者を、そのようにお氣にかけてくださいますの？ わたくしなど、何のとりえもない、面白味のない人間でございますのに」

だからもう付きまとわないで、ほっといてくれ！ と遠まわしに言ってみたのだが、

「面白味がないなど、とんでもない」

ジグモンド王子は、酷薄そうな薄い唇をゆがめ、わたしを見た。

王族だけあって、ジグモンド王子は整った容姿をしている。

ゆるく波打つ金髪、薄い青い瞳の貴族的な美貌は、少女の夢見る王子様そのままの姿だろう。しかしわたしは、背筋が寒くなる思いで王子を見返した。

「君は、とても美しいよ。このつややかな黒髪、大きな黒い瞳に、白い肌。……そう、この白い肌」ジグモンド王子は手を伸ばし、わたしの頬を撫でた。ゾツとして飛びのきそうになるのを、わたしは必死にこらえた。

「この白い肌が裂け、血が流れたら、どんなに美しいだろう。……ねえ、エリカ、君は、悲鳴を我

慢するのが得意のようだね。君は我慢強く、自分の心を律する術を知っているようだ」

ジグモンド王子の言葉に、わたしは血の気が引く思いがした。

それはもしかして、あの時のことを言っているのか。

「……しかし僕は、どうしても君の悲鳴が聞きたい。君を鞭打ち、血を流させてやりたいんだ。僕は、君をととても気に入っている。正室にはできないが、君を側室として迎えたいと思っているんだ」

……その場で卒倒しなかった自分を褒めてやりたい。

王子はあの時、隠れていたわたしに気づいていたのだ。気づいて、そして、小姓を助けたわたしに興味を持った。

やってしまった！ と後悔しても、もう遅い。

それに、たとえ気づかれていたとわかっていても、あの時、小姓を助けず逃げ去るという選択肢はない。

わたしはとっさに言った。

「お、おお恐れ多いお言葉ですわ。し、しかしながら側室というのは、その……、わたくし、伴侶となる方の愛情を、どなたかと分け合うなんて耐えられませんわ。わたくしは、ただ一人の方を愛し愛され、ともに人生を歩んでいきたいと、そう願っているのです」

これは半分本音だ。

貴族なら、夫が側室の一人や二人持っても特に醜聞にはならないが、わたしの父や兄のように、ただ一人の伴侶を誠実に守るケースも決して珍しくはない。たとえ相手の家格を落としても、側

室を作らぬと婚前契約書で誓ってくれる相手を望む貴族令嬢も多いのだ。

もちろん実際のところ、わたしはジグモンド王子の愛情なんて、これっぽっちも望んではいない。ただ、正室ではなく側室としてという申し出ならば、これでお断りできると思ったのだ。

「へえ、君は案外、可愛らしいところがあるんだねえ」

ジグモンド王子はクスクス笑って言った。

「そういえばルカーチ家の現当主も君の兄も、そろって側室を持っていなかったな。それでそんな馬鹿げたことを考えたのか。……だけどエリカ」

ジグモンド王子の声が低くなり、瞳は冷えた色をたたえた。

「愛なんて、信じるに足りないものだよ。そんなのは一時の感情に過ぎない。そんなものにこだわって、この僕の申し出を蹴るなんて間違っている。それに、第二王子の正室として振る舞うなんて、君には荷が重いんじゃないのかい？ 僕は、君の目的を思っているんだよ。側室なら、面倒な責任を負う必要はない。君は自由でいられるんだ」

わたしは唇を噛んだ。

正室ではなく側室として迎えることが、わたしへの思いやりだつて言うのか。それは思いやりじゃなく、侮辱と言うんだよ！ もちろん正室だつてお断りだけど！

しかしそういうことなら、これは断り文句として使えない。ならば……。

「ええっと、あのその、申し遅れましたが、実はわたくし、すでに婚約しておりますの……」
冷や汗をだくだくかきながら、わたしは必死に言った。

「……へえ？ ルカーチ家が君の縁談をまとめたなんて話、聞いたことはないけど」

そうでしょうとも。今この瞬間、口から出まかせ言っただけですからね！

「あつ、あー、ええ、まあ、お相手のご事情で、その、婚約のことは伏せてありますの。ええと、卒業と同時に、婚約を発表する予定ですわ」

ふうん、とジグモンド王子はじろじろとわたしの顔をみつめ、言った。

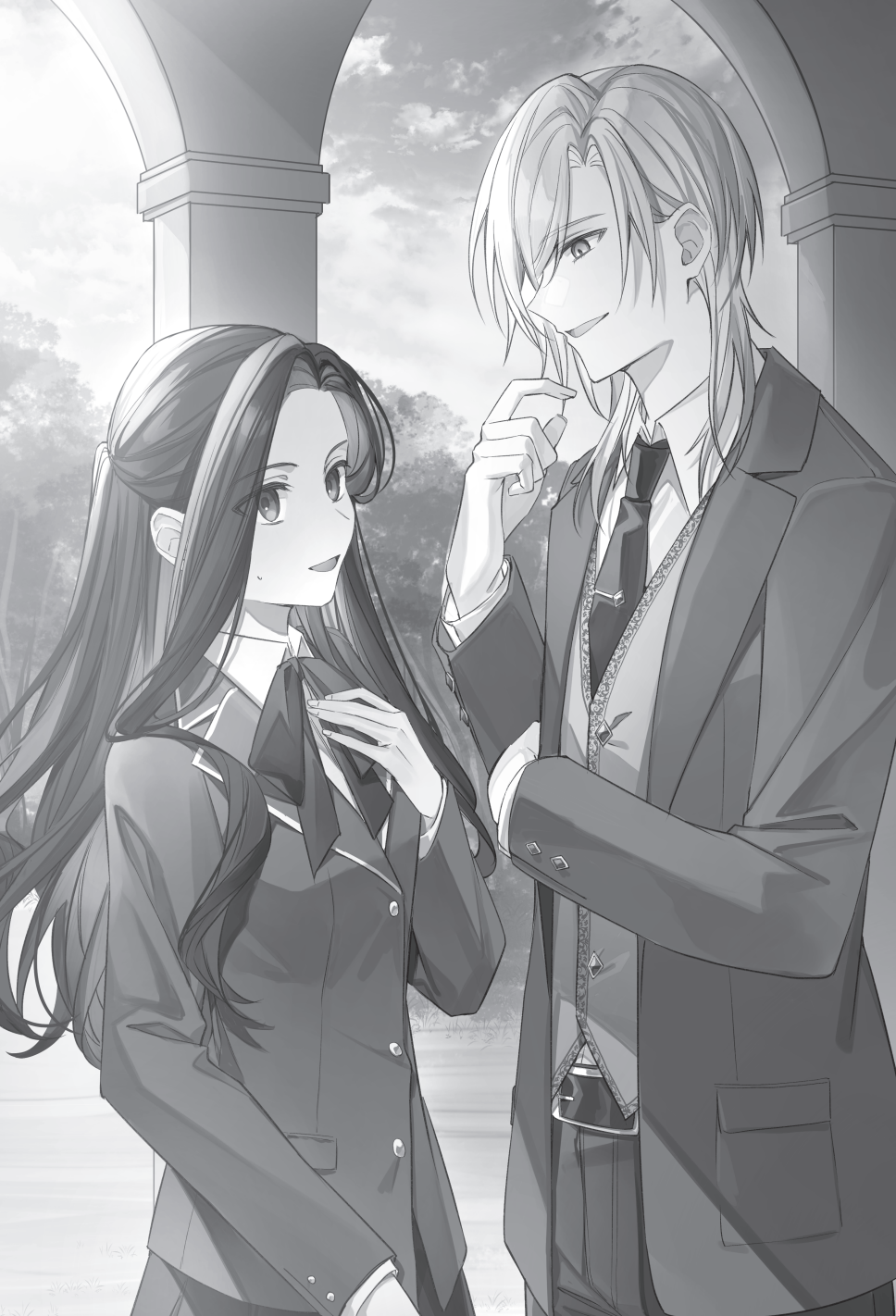
「それはおめでとう。……卒業と同時に婚約か。僕からお祝いを贈らないといけないな」

「そつ……、お、恐れ多うございますわ……」

「どうしたの？ 顔色が悪いよ、エリカ」

寒気のするような微笑を浮かべ、ジグモンド王子は言った。

「僕のお気に入りのエリカが婚約するんだから、盛大に祝わなければ。ルカーチ伯爵にも、くれぐれも宜しく伝えておいてくれ。いいね、エリカ」



一章 『男になりたいわけではない』

いったい何が悪かったのか。

わたしは寮の部屋で、一人反省会を開いていた。

第二王子の小姓を助けたことがまずかったのか？ 貴族なら、見て見ぬふりをするのが正解だったのか？

だが血まみれの小姓を放置するのはさすがに……。そんなことをしたら、わたしはあのサデイスト第二王子と同じになる。

そもそも貴族や王族は、弱い立場にある者を守るために存在するはずだ。そんな考えは建前にすぎないとしても、それを王族自らブチ壊すのはどうなんだ。弱者を守るための権力を濫用し、逆らえぬ立場の者を虐待するなんて、本末転倒もいいところだ。そんな人間に、人の上に立つ資格などない。

その時わたしの脳裏に、ふと、子どもの頃にかけられた言葉がよぎった。

——あなたは、人の上に立つにふさわしい、立派なお方です。

あなたが男なら、誰より優れた領主になれたでしょうに、と残念そうに告げた声を、わたしは懐かしい記憶とともに思い出していた。

子どもの頃、王都に呼び戻されるまで、わたしはずっとルカーチ家の領地で過ごしていた。今に

して言えば、南部の政情不安が中央にまで及び、王都周辺も騒然としていたせいだろう。子どもだったわたしは知る由もなかったが、現国王の失政により、南部セファリア地方から始まった紛争が、野火のように王国全土に広がりつつあったのだ。

だが、中央から離れたルカーチ家の領地は、そうしたきな臭さとは無縁だった。

領民は、国王よりも領主である父を畏れていたし、現王家より古い歴史を持つルカーチ家を主に戴くことを、誇りに思っているようだった。王都にはない、のびのびした自主独立の気風がそこにはあり、それは子どものわたしにも強い影響を与えた。

こういうわけで、王都にいる両親がうるさく干渉しないのをいいことに、わたしはまるきり領民と同じ生活を送っていた。

あの頃、そろそろ淑女教育を、とわたしの顔を見れば同じことしか言わない行政官を避け、わたしは乳母の家に入り浸っていた。というか、そこに住んでいた。本来なら父に領地経営を任された行政官の屋敷にわたしも住むべきなのだが、それだとせつかくの自由な田舎暮らしが台無しになってしまう。

そのことで行政官に文句を言われても「だって、父上和母上に会えないのがさびしいんだもの。屋敷でわたしは一人ぼっちだけど、ばあやのところなら、一人じゃないもの」と泣き真似をすれば何とかなった。粉屋のハンナに教えてもらった手だが、これは行政官に絶大な威力を発揮した。幼い娘が両親にも会えず田舎に放置されているのを、彼なりに不憫に思ってくれていたのだろう。

そんな風に我が世の春を謳歌^{うたが}していたわたしだが、問題がなかったわけではない。「貴族のくせに」「女のくせに」は飽きるほど言われたし、領民同様に暮らしているとはいえ、やはり最後まで

消えない壁のようなものを感じていた。

今にして思えば、わたしは何もわかっていなかった。貴族としての責任も、その意味も。

だから、子どもたちだけで魔獣退治をするなど、無茶なことができたのだ。

それはわたしが九歳の時のことだった。光の月の初旬、例年なら春めいて早咲きのシカラの花が香る頃だが、その年は部屋に置いた顔を洗う水に、毎朝薄い氷の膜が張るほどの寒さが続いていた。その年の秋は、実りが少なかった。飢饉^{ききん}というほどではなかったが、そのせいでいつもなら残される山の幸も領民によって狩りつくされ、ふだんは大人しい魔獣も、飢えて気が立っていたのだ。

だが、山から下りてきた魔獣のせいで、山裾の領地に被害が始めても、行政官はいつかな動くとしなかった。領地には常駐するルカーチ家直属騎士団があつたし、なんならお抱え魔術師までいたのに、いっこうに魔獣討伐に向かうとしない。ひょっとして冒険者を束ねるギルドに魔獣退治を依頼したのかとも思ったが、ギルドで働いている領民に聞いても、そんな話はない。

いったい何をしているのかと、わたしとわたしの遊び仲間が苛立っていた。

今ならば、魔獣について精査してゐるんだろうとか、悪い人ではないのだが事なかれ主義の行政官が、父から指示があるまで知らんふりを決め込んでゐるんだろうとか、いろいろと察することのできるのだが、そこはまだ十歳にも満たぬ子どもである。何もしない大人がじれったく、ただただ歯がゆかった。

大人が動かないなら、自分たちでやればいい。

そう思ったわたしは、自分と仲間たちだけで魔獣を退治しようと、計画を練った。

まず魔獣を追い立て、攻撃しやすい場所へと誘導する。魔獣をおびき出すのに最適な経路を探し出し、腕自慢のヨハンとすばしっこいアダム、そして目端めはしのきくレイラを要所に配置すれば、仲間
に怪我をさせずに済むだろう。

しかし、誰が最後に魔獣を仕留めるのか？

目撃情報から、おそらく魔獣はマッドベアと思われた。クマに似ているが、大きさがその倍もある魔獣。騎士であっても数人がかりであたらねば、仕留めるのは難しい。

それを子どもだけで倒そうとするなら、かなり威力のある魔法が必要だ。しかし、魔力を持っているのはわたしだけ。つまり、わたしが倒すしかないのだ。

そう決意したわたしはルカーチ家お抱えの魔術師に会い、彼を拝み倒した。普段は寄り付きもしない行政官の屋敷——魔術師の住まいでもある——に出向き、「頼むから一週間で『炎の槍』を使えるように訓練してくれ」と頭を下げた。当時、わたしは一番得意な火魔法でも『炎の刃』までしか使えず、それではマッドベアを倒すには弱いと思ったのだ。

魔術師は、不思議そうな表情でわたしを見た。

「お嬢様は、ルカーチ家の姫君です。私に命令して、魔獣を倒せとおっしゃらないのですか？」

「あなたの主は父上でしょ。わたしに命令する権利はないわ。でも、魔法を教えるくらいなら、契約違反にはならないでしょう？」

「何故そこまでして魔獣を倒そうとするのです？ 行政官だって、いずれは動きますよ。たぶん領民が二、三人ほど死ぬか重傷を負うかすれば」

「なんてこと言うの！」

わたしは思わず怒鳴った。

「それじゃ遅いのよ！ 誰かが怪我した後じゃ！」

怒るわたしを、魔術師はつくづくと眺めた。そして少し考えた後、あっさり頷いてくれた。

「いいでしょう。私にできることは致します。……が、一週間で『炎の槍』を習得するためには、かなり厳しい訓練を課す必要があります。お嬢様が泣き言をいった時点で訓練は終わりにしますの
で、ご覚悟ください」

魔術師はウソをつかなかった。言葉通り、斟酌など一切なしの厳しい訓練をわたしに課した。

……いや、お願いしたのはこっただけどきあ……。思い出ただけでも泣けてくる。子どもに失神するまで魔法を打たせつづけ、毎日魔力を使い切らせるとか、まさに鬼の所業。しかも気絶しかけたわたしを見ても、顔色ひとつ変えないんだから、ほんとあいつ……。うん、いや、もちろん彼には感謝します、ほんとです。

ともかく、そうした血と汗と涙の特訓のおかげで、一週間後、わたしは何とか『炎の槍』を使えるようになった。……ただし、一回だけ。

この魔法は魔力使用量が多いため、まだ子どもで今ほど魔力のなかったわたしは、ギリギリ一回しか『炎の槍』を打てなかったのだ。つまり、失敗はできない。必ず一回で、マッドベアの急所に『炎の槍』を当てる必要がある。

魔獣討伐は、大人たちに見咎められないよう、未明に行うことに決めた。

足元を照らすのは月明かりだけだが、何度も確認した山道だ。仲間たちは迷いなく進み、マッドベアを山から追い立て、川向こうの平地へとおびき出した。もし攻撃が失敗しても、マッドベアが

川を渡る間に仲間たちを逃がすことができる。

ただ、わたしは逃げられないだろう。『炎の槍』を打った後、おそらくわたしは魔力切れで倒れる。その時にマッドベアが生きていれば、意識を失ったわたしに反撃する術はない。

だがその時は、何も考える余裕はなかった。月光を浴びて眼前に迫るマッドベアを見た瞬間、胃がひっくり返り、吐き気がした。

わたしは歯を食いしばり、どうってことないと自分に言い聞かせた。簡単なことだ、練習の通りにやればいい。余計なことは考えるな。

威嚇いかくの声をあげて、マッドベアが襲いかかってくる。鼓膜が破れそうな咆哮ほうこうと強烈な臭気に、膝が震えた。この魔獣、この生き物を殺すのだ。わたしの手で。わたしの魔法で。

『炎の槍！』

渾身こんしんの力を込めた詠唱とともに、炎の奔流が川に向こう、マッドベア目がけて飛んでいった。炎はまさしく槍のように、真っ直ぐマッドベアの額を貫いた。

額を貫かれたマッドベアは、たたらを踏み、立ち止まった。ふらふらと酔っぱらったように体を揺らした後、マッドベアは大地を震わす勢いで、どうと倒れた。

やった、倒した、やったぞエリカ、と喜びに沸きたつ仲間たちの声を聞きながら、わたしも意識を失って倒れた。よかった、これで誰も怪我をしなくてすむ、と安堵あんどしながら。

「……なんとまあ。本当にマッドベアを倒されるとは」

薄れていく意識の中、魔術師の声が聞こえたような気がした。

実際、彼はそこにいたのだ。彼は密かにわたしたちを見張っていた。わたしたちが魔獣討伐に失



敗した場合に備え、主の娘であるわたしを守るために。

だが、わたしたちは魔獣討伐に成功した。誰も怪我をしていない。どうよ！ とわたしたちは浮かれていた。……のだが。

結果として、ある意味、わたしは大打撃を受けた。

怒り狂った行政官に、事の仔細しさいを報告された父が、わたしを王都に呼び戻すと決めたからだ。

「お嬢様、道中お気をつけて」

王都行きの馬車はルカーチ家の騎士たちでがっちり護衛され、たとえ再びマッドベアが現れても問題なさそうだったが、見送りにきた魔術師はどこか心配そうな表情をしていた。

ちなみにわたしの遊び仲間は、行政官およびそれぞれの両親にきつく叱られたうえ、しばらく外出禁止の刑を言い渡されたため、わたしの見送りには来られなかった。

「大丈夫よ、騎士たちがいるもの。わたしだって、マッドベアを倒したのよ」

笑ってそう告げると、魔術師は首を横に振った。

「いいえ、お嬢様。あなた様がこれから向かわれる先は、魔獣など及びもつかぬ恐ろしい怪物が住まう場所です。その怪物は、剣でも魔法でも倒せない。……わたしは、心配なのです。お嬢様がその怪物に傷つけられるのではないかと」

わたしは魔術師を見た。魔術師の言う『怪物』が何なのか、うつすらとだがわかっていた。女のくせに貴族のくせにと、それまでだっているいろ言われていたが、王都に戻ればきっとその何倍、何十倍とわたしを縛り、型に押し込めようとする力は強くなる。わたしがわたしでいられなくなること、そのせいで傷つくことを、魔術師は心配してくれたのだ。

魔術師はわたしをじっと見つめた。

「お嬢様、あなたは自ら先頭に立って魔獣を倒し、領民を守りました。あなたは、人の上に立つにふさわしい、立派なお方です。……あなたが男なら、誰より優れた領主になれたでしょうに……」
惜しいことです、と告げる魔術師に、わたしは少し考えた。「おまえが男なら」とは、よく言われたことだ。しかし、たとえ男であったとして、そして領主になったとして、それでわたしは満足するのだろうか。

よくわからないが、違うような気がする。わたしはそんなことを望んではない。

「わたしは、男になりたいとは思わないわ。領主には兄上になるし、わたしは……」

わたしは言いよんだ。自分が何を望んでいるのかは、まだわからない。ただ、

「……わたしは、わたしでいたい。他の誰でもない、自分のままで、怪物にも負けなくらい、強くなりたい」

魔術師はひざまずき、まるで王に對するよううやうやしく言った。

「お嬢様ならおできになれます。きっとお望みの通り、いえそれ以上、強くおなりになるでしょう」

あれから八年。わたしはまだ、怪物相手に悪戦苦闘している最中だ。



卒業まで三ヶ月を切った週末、わたしは学園から王都の屋敷に戻った。

「ほう、珍しいな。おまえが屋敷に戻るなど」

面白がるような声をかけられ、振り返ると、父が玄関ホールに立っていた。王宮から帰ったばかりなのか、髪を撫でつけ、刺繍のほどこされた丈の長いケープをまとっている。

「……お久しぶりです、父上」

「まったくだ。王都にいるのだから、たまには顔を見せに戻ってこい。アナベルがさびしがっているぞ」

見かけによらず愛妻家の父は、アナベルお母さまを常に気遣っている。その気遣いの十分の一でもわたしに向けてくれたら、だいぶ人生ラクになるんだけどなあ。

「……いろいろ忙しかったんです。母上のところには、後で顔を出しておきます」

「なるほど。忙しかったということは、ついに婚約者を見つけたのか？」

ニヤニヤ笑う父上を、できることなら張り倒してやりたい。無理だけど。

父にはジグモンド王子に関して、すべて事情を伝えてあるが、今ひとつ危機感が足りないというか、「そうは言っても第二王子の側室など、名誉なことではないか」と考えているのだ。母も父に同意していて、この件に関しては泣き落としもきかない。

父も母も冷酷ではないが、そこはやはり貴族、娘の幸せより家の繁栄が優先事項なのである。しかたない。

ただ、ジグモンド様の残酷さや人望のなさについてもよく承知しており、嫌がるわたしを無理に嫁がせるほど、旨みのある相手とも思っていないのが救いである。「そんなに嫌なら自分で何とかしなさい。出来なければ、あきらめて第二王子に嫁げ」というスタンスだ。

だからこうやって、わたしが婚約者探しに奔走するのを、半ば笑ってみているわけだが。

「卒業まであと三ヶ月か。いい加減、腹をくくつたらどうだ」

「腹をくくるとは、国外へ脱出しろということでしょうか」

「そこまで殿下を嫌わなくともよろう」

父は、わたしの心を読もうとするかのようにわたしの目を覗き込んだ。その冷えた眼差しに、背筋が寒くなる。父上、ナチュラルに娘を威圧するのはおやめください。

「……たしかにジグモンド殿下には色々問題があるが、能力がないわけではない。おまえの手綱さばきによつては、面白いことになりそうだと思うが」

「わたしの結婚を面白がらないでください。……父上は以前、おっしゃいましたよね。ルカーチ家は王家の奴隷ではない、対等の立場にある取引相手のようなものだ、と。だから王家に命じられるまま、嫌いな相手に嫁ぐ必要はないのだと」

「そうだな、確かに言った」

「ならば、あと三ヶ月、お待ちください」

わたしは静かに言った。

「必ずあと三ヶ月で、婚約者を見つけてみせます」

「……そうか」

父は目を細め、まるで悪魔のような笑みを浮かべた。

「よからう、あと三ヶ月、あがいてみるがいい。楽しみに見物させてもらうぞ」

実の娘にこの言い草。わたしは、さっさと踵かかとを返して母の居室へと向かう父の後ろ姿を、苦々

しい思いで見送った。

ふう、とため息をつき、一年間におよぶツライ婚約者探しの過去を振り返る。

婚活する際、わたしはまず、お相手に平民を考えた。家は兄が継ぐから、わたしは平民と結婚してもかまわないのだ。そうなれば便宜上、実家からは縁を切られることになるが、そこは別に気にならない。子どもの頃は領地で平民同然の生活をしていたし、何なら今の貴族としての生活より、自分に合っていたと思う。

だが婚活をはじめてすぐ、わたしは平民との結婚のほうで、条件が厳しいことに気がついた。

貴族同士の結婚は、家格の釣り合いや資産の有無などが問題となるが、逆にいえば、それ以外はさほど重要視されない。しかし、平民の結婚とは、暮らしに直結する契約だ。どれだけ稼ぐ能力があるか、もしくは家事方面が有能か、という項目をシビアに採点されるのだ。

そしてわたしは、見事に平民の望むお嫁さん像から遠くへだたった人間だった。金になる治癒魔法は使えない（危険視される火、風、氷などの攻撃魔法がとつても得意）、家事全滅（料理は切つて焼くだけしかできず、それ以外はメイドに習ったが匙さしを投げられた）、持参金もありません（平民と結婚する場合、立场上絶縁されるため）、ときでは、どうしようもない。

ならば貴族を、と探してみても、わたしは既に学園で、第二王子のお気に入りとして有名だ。ジグモンド様があちこちで、わたしを側室として迎えたい、と吹聴ふいちようしてまわっているため、縁談がひとつもまわってこない。

第二王子のお気に入りを婚姻相手として望むなど、第二王子に正面切つてケンカを売ると同義だ。ジグモンド様は、権力もさることながら、その残酷さや執念深さを恐れられている。そこを押

してまで、わたしを望んでくれるような家など、どこにもなかったのだ。

こうなったら、もう最後の手段しかない。

学園卒業まで、もう三カ月を切っている。多少は妥協しなければ、あのサデイストの餌食^{えじき}となってしまう。

わたしが今回、久しぶりに屋敷に戻ってきたのは、その最後の手段に賭けようと思ったからだ。今日は兄の親友である、騎士レオンが屋敷を訪れる予定だ。

レオンはバルタ男爵家の跡取り息子で、王宮の第一騎士団に所属している。魔力はまったくないが、騎士としての腕前を高く評価され、団長の信頼も厚い。

それなのに、二十二才になる今の今まで、婚約が決まらず独身である。容姿に問題があるわけではない。好みもあるだろうが、レオンは短い金髪に緑の瞳の爽やかマッチョで、容姿だけなら貴族令嬢からの人気も高い。

しかしレオンには、それらすべての美点をもつても越えられぬ、ある大きな問題があった。

「エリカ、戻っていたか」

「兄上、レオン様も。お久しぶりでございます」

兄とレオンがやってくるのを待ち構えていたわたしは、二人に挨拶した。すると、

「エリナ殿、お久しぶりです」

にこにこ愛想よく、レオンがわたしに挨拶を返した。

いつも爽やかで、愛想もいい。性格はいいんだ、性格は。

「……レオン様、わたしの名前はエリカですわ」

「おお、そうでした！ いや、これは申し訳ない」
ハハハ！ とレオンは爽やかに笑い、頭を下げた。

……このやりとり、何度目だろう。だいたい、最初に兄がわたしを「エリカ」って呼んでるのを聞いてなかったのか。レオンでなければ、わざと間違っくんじゃないかと疑うところだ。

「俺はどうも、人の名前を覚えるのが苦手で。本当に申し訳ない、エリカ殿」

再度、頭を下げるレオン。礼儀正しいし、爽やかで、性格もいい。

ただ、バ……、記憶力があまりよろしくないのである。

レオンと同学年の兄が、あまりの成績の悪さに退学スレスレだったレオンを見かね、なんとか卒業できるよう、勉強を見てやっていたらしい。

「レオンの面倒みてたら、学園から、教師として残らなかつて声をかけられたよ……」

と疲れたように兄が言っていた。どうも学園側も、レオンの扱いには手を焼いていたらしい。

素行が悪いという訳ではない。教師にも生徒にも礼儀正しく、体術剣技などはトップクラス、騎士団への入団が既に決まっていたレオンを、「バカだから」という理由で退学にはさせられず、困っていたのだろう。

それにレオンは、本当の意味でバカという訳ではない、とわたしは思っている。自分の興味のある分野、剣術や筋肉については、レオンは驚くほどの記憶力を誇り、知識も研究者並だ。

つまりレオンは、頭の中がすべて剣術や筋肉で埋まっており、色恋沙汰にはまったく興味がないのだ。

そのためレオンは、女性に告白されて付き合いはじめても、一週間とたたずにフラれてしまう。

何度言っても名前を覚えてもらえず、話題は剣技や筋肉についてだけ、女性の話は右から左に流されるのだ。そりゃ相手はツライだろう。わたしだってイヤだ。

だが、もうそんな贅沢ぜいたくを言っている場合ではない。ここで婚約者をつかまえては、三ヶ月後、わたしはサデイスジグモンド様の玩具おもちゃとして鞭打たれることになる。

わたしは、兄の部屋へ直行しようとするレオンを引き留めた。

「お忙しいところ、申し訳ありません、レオン様。少しお時間をいただけませんか？」

わたしはレオンを見上げた。

レオンは何度も屋敷に来ていて、よく話もするし、気心も知れている。少なくとも、嫌われてはいないはず。

また、レオンの実家は、元々平民だったのだが、先代当主が養豚業で国の飢饉に貢献し、爵位を賜ったという経緯がある。そのため、貴族としての格は低いが、第二王子であっても手出しはしづらい。

そしてレオンもわたしも、婚約者を探している。

ならば！　ここでわたしが恥を捨て、婚約者になってくださいと頭を下げれば、すべて丸く収まるのではないだろうか！

「俺に話ですか？」

レオンは足をとめ、わたしを見た。

「ちようど良かった。俺もエリカ殿に、話があつたのです」

ん？　とわたしは首をひねった。

レオンがわたしに話って、なんぞ。わたしは、筋肉にも剣術にも興味はないのだが。

わたしの怪訝^{けげん}な表情に気づいたのか、レオンがにこやかに説明した。

「以前、俺がエリカ殿にご指南いただいた件です。どんなに見合いをしても、断られてしまうのは何故だろう、とご相談した際の」

ああ、あれね！ とわたしは頷いた。

レオンは男爵家の跡取り息子なので、両親から結婚をせっつかれているのだが、見合いでことごとく失敗してしまつたため、どのように振る舞うべきか、と相談を持ちかけられていたのだ。

「エリカ殿にご指導いただいた通り、俺は何も言わず、ただ『そうですか』と『それは大変ですね』とだけ相槌を打ったところ、見合いがうまくいったのです！」

レオンが輝く笑顔でわたしに告げた。

「ありがとうございます、エリカ殿！ この年まで婚約者が決まらず、親にもさんざん心配をかけましたが、このたび、やっと！ 婚約することができました！」

.....

レオンが、婚約.....。

王都中の貴族が結婚しても、コイツだけは無理だろうと舐^なめていたレオンが.....。

「エリカ殿？」

不思議そうな表情のレオンに、わたしは慌てて言った。

「そ、そうでしたの。それは.....、それはおめでとうございます。ようございましたわね」

「ありがとうございます、エリー殿のおかげです！」

礼儀正しくお礼を言うレオン。またもや名前を間違えられているのだが、もはや訂正する気力もない。

そうか……。レオンでさえ、婚約できたのか……。

わたしは一年かけても、婚約できなかったというのに。

……これはもう、ほんとに国を出奔するしかないのかもしれない。

にこやかなレオンを前に、わたしは絶望のため息をついた。

「そういえば、エリー殿も、婚約者を探し回っていらっしゃるとか！」

レオンが元氣よく言った。

「え……。ああ、ええ、まあ」

わたしは曖昧な笑みを浮かべ、レオンを見上げた。

もう少し言い方ってものが……と思ったが、レオンに多くを期待すべきではない。

「エリー殿のおかげで、自分も婚約することができました！ お礼といっちはなんだが、友人を紹介させていただければと思うのですが」

なんですと!?

わたしは、爽やかな笑みを浮かべるレオンを見上げた。キラリと光る白い歯が、いつも以上に輝いて見える。

レオン、天使。

エリーナでもエリーでも、好きな名前でお呼び下さい、どうぞ！ 筋肉バカなんて言ってすみません！ あなたはマツチヨな天使様！

「大変ありがたいお申し出ですわ！ ぜひぜひ！ そのご友人について教えて下さいませ！」

「おいエリカ、そんなはしたない……」

レオンの隣で兄がぶつぶつ言ってるが、気にしない。

兄のアドリアンは、学園卒業と同時にさっさと婚約を決め、昨春、めでたく華燭かしよくの典を挙げた勝者だ。お相手のユデイト様は、淑やかで優しい、貴族女性の鑑のようなご令嬢である。

わたしやレオンのような婚活底辺戦士からすれば、兄は雲の上の存在すぎて、参考にもならない。容姿はわたしと瓜二つ、違いといえば瞳の色くらい（兄は緑、わたしは黒）と言われているのに、何故……。やはり性格が問題なのか。

「レオン様、その方のお名前は？ 年齢は？ 何をしてらっしゃる方ですの？ 貴族、それとも平民？ どちらでも構いません、何の問題もございませんわ。ただ……」

わたしは言葉を切り、レオンを見上げた。これだけは言っておかねば。

「わたくし、優しい殿方でなければイヤなのです。使用人など、自分より弱い立場の者を虐待するような、そんな方は、どれほど地位が高く財産をお持ちでも、絶対にイヤですわ」

断言するわたしに、兄アドリアンが哀れみの眼差しを向けた。

兄は、ジグモンド第二王子の評判をよく知っている。さすがに妹をサディストに差し出すことに、思うところがあるのだろう。

「ああ、それならば大丈夫です」

レオンはにこにこと言った。

「彼は、とても優しい男です。平民なのですが、俺よりよほどマナーもしっかりしていて、教養も

あります。十歳の時に親を亡くしたのですが、魔力量の多さを神殿に認められ、孤児院ではなく中央神殿に入りました。それからは見習い神官、長じてからは神官として働いている、真面目な奴なんです」

へー。なんか、かなり優良物件な匂いがするぞ。

「そうなんです、神官様なんです」

あまり信仰心のないわたしだが、婚約のためなら朝昼晩、食前食後にお祈りを捧げましょう、頑張ります！

「ただ、彼は神殿から離れたらしいんです。子どもの頃から神殿にこき使われて、いい加減嫌気がさしたようで。還俗げんぞくするには、実家からの要請が必要ですが、彼は孤児なので、婚約するしかないんです」

なるほど、そういう事情かー。

ふむふむ、と納得するわたしの横で、兄が怪訝そうにレオンに言った。

「そんな神官、いたか？ 平民だが魔力も教養もあるうえ、優しく真面目な年頃の神官など」

「いるぞ。アドも、戦場で一緒になったことがあったと思ったが」

覚えていないのか？ と、事もあるうにレオンに聞かれ、兄は焦った表情になった。

ちなみにレオンは、兄アドリアンを『アド』と呼んでいる。何度も名前を間違われ、そのたび訂正するのに疲れた兄が、二文字ならばいけるだろう、と『アド』呼びを提案したのだ。それは成功し、レオンは兄を間違わずに『アド』と呼んでいる。

わたしも『エリカ』という本名にこだわらず、『エリ』と呼んでもらうよう、提案してみるかな、

と思っていると、

「その神官の名は？ 何と言うのだ？」

兄の言葉に、レオンが考え込んだ。

「あー、名前か……。何と言ったかな、たしかアドリー……、いや違う、エミール……、違うな、……うむ……」

顔をしかめ、必死に思い出そうとするレオンに、兄が言った。

「そいつの特徴は？ 髪や瞳の色、背の高さなどを言え」

「背は俺より高い。神官だが身体能力がかなり高く、扱いの難しい両刃斧おのを使いこなす。かなりの手練てだれだ」

「両刃斧……？」

不思議そうに聞き返した兄は、次の瞬間、驚愕きょうがくの表情を浮かべた。

「お、おい、まさかそいつ……」

「髪は銀髪だ。それは見事な髪でな、瞳も美しい紫色をしている」

まあ、銀髪に紫色の瞳だなんて、おとぎ話の妖精のよう。ステキー！

テンションを上げるわたしをよそに、兄は急激に顔色を悪くした。

「銀髪って、まさかそれ……、ナーシル神官のことか……？」

「おお、それだそれ！ ナルシーだ！ アドはすごいなあ！」

既に名前を間違っているレオンに突っ込むこともなく、兄はわたしの視線を避けるように横を向いた。

……なに、なんなの。兄のこの態度……、すつごく不安なんですけど。

わたしはレオンに向き直った。

「レオン様、確認なんですけど、そのナルシー……じゃなかった、ナーシル様は、お優しい方なのですよね？」

「はい！」

レオンはきっぱり言い切った。

「あいつは優しい奴です。身分の上下を問わず、傷ついた者を魔力の限り治療し、弱い者を庇^{かば}って戦います。神官ですが、騎士の手本のような奴です」

「まあ……」

わたしはちよつと感動した。

筋肉バカのレオンにここまで言わせるとは、その神官、かなりの好人物ではなからうか。

「わかりました！」

わたしは力強く頷いた。

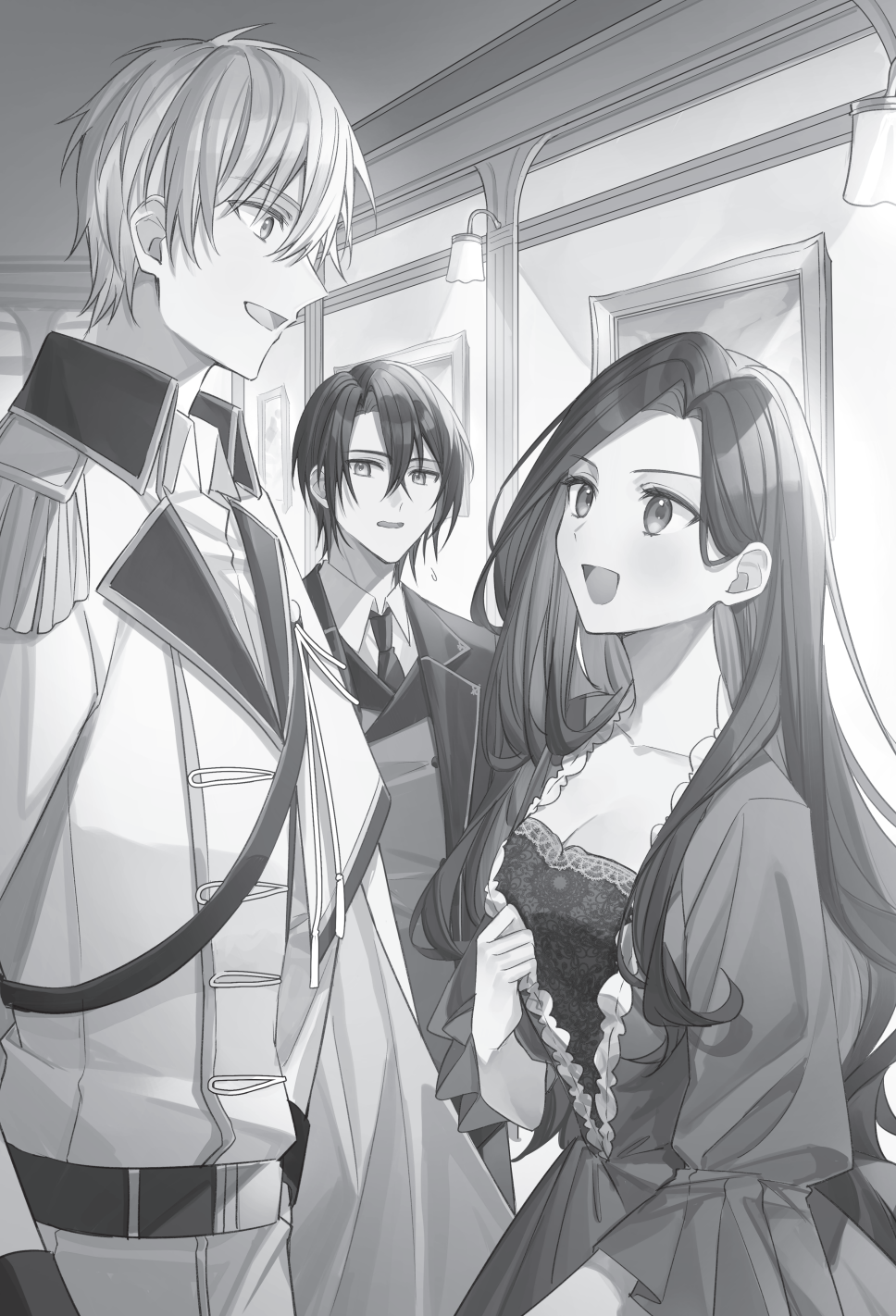
「ぜひ、そのお方とお会いしたいと思います！ レオン様、その神官様にお話を通して下さいませ！」

「お、おい、ちよつと待てエリカ」

「待ちません時間がないんです兄上！」

わたしは兄を怒鳴りつけた。

「兄上は、わたしがサドの餌食になってもいいとおっしゃるんですか!? 性格最悪の異常者の玩具



にされて、鞭打たれて血を流しても、それでかまわないと!」

「い、いや、それは……」

兄が口ごもる。

わたしはレオンに、きっぱりと言った。

「お願いします、レオン様! その方が還俗するため婚約者が必要だというのなら、それはわたしと同じこと! わたしも、平和な未来のために、何がなんでも婚約者が必要なのです! お願いします、その神官様とお見合いさせて下さいませ!」

兄の態度は気になるが、たとえどんな欠点があろうと、あの第二王子よりはマシなはず。
わたしは鼻息も荒く、レオンに見合いを要求したのだった。



「わたし、おかしくないでしょうか?」

「朝から百回は同じことを言ってるぞ、エリカ」

疲れたような兄アドリアンに、わたしは言った。

「だって、ようやく婚約者になってくれそうな方とお会いできるんですよ! なんとか良い印象を持っていたきたいのです!」

ふだん、あまりドレスなどに興味を見せないため、淑女らしくないと母に嘆かれるわたしが、今日は違う。